第四回日本白鳥の会研修会

新潟の白鳥を観察

ラムーサル条約実現へ申し合わせ

昭和54年2月24・25日の両日、新潟県水原町で第4回日本白鳥の会研修会が、地元水原町と瓢湖の白鳥を守る会の協賛を得て開催された。全国からの参加者は40名ほど。主題の「定時定点調査の充実について」それぞれ以下のような発表があった。

1. 瓢湖の白鳥　吉川繁男
2. オオハク・コハクの嘴峰像　三上士郎
3. 渡りと気象　大森常三郎
4. 古徳沼の白鳥に関する研究　菊地昶史
5. 自然保護と術語の統一　岩田正俊
6. 新潟県の白鳥渡来状況　本田清
7. コハクJUVについて　吉川吉枝

第2日目、福島潟・鳥屋野潟の白鳥を視察、福島潟では周辺の水田にエサをあさるコハクチョウ集団353.羽にまじり標識白鳥の 013C、 023C、 035C、の3羽を確認するなど成果をあげた。

この催しについては第1日目、各新聞社が取材したが、実際に記事となったのは朝日新聞だけだった。以下は同紙が報じた記事をそのまま転載させていただいた。

鳥屋野潟の白鳥を視察する会員一行

ハクチョウ保護で研修会

え付け やむなし

瓢湖畔で日本白鳥の会

「自滅に導く」に強く反論

日本白鳥の会（家田三郎会長）の第４回研修会が２４、２５の両日、ハクチョウ渡来地で知られる北蒲・水原町の瓢湖畔のホテルで開かれた。全国各地でハクチョウの保護や研究にあたっている会員ら約５０人が参加、ハクチョウの実態や保護のあり方などについて、熱心に討議した。その中でハクチョウを取り巻く環境が年々悪化している状況がクローズアップされ、その保護のためには最近論議を呼んでいる「えづけ」もやむを得ないことが確認された。

研修は１日目は研究発表、２日目は瓢湖や福島潟、鳥屋野潟など県内の主な渡来地視察、という日程で行われた。

発表の１番手は瓢湖の「ハクチョウおじさん」吉川繁男さん。吉川さんは昭和２５年、父親の重三郎さんの代から同湖でえづけを続けてきた。この間に、福島潟の水面が干拓事業で大幅にせばめられるなど、近くの自然のえさ場が次々と失われてきた。それでも湖には９５０羽のハクチョウをはじめカモ類など１万羽近い水鳥が毎冬やってくる、と現況を説明。「水鳥たちの最大の天敵は人間だ。だからこそ、それを守るのも人間でなければならないと思う」と決意を述べた。

続いて福島県や茨城県、山形県などの会員らがそれぞれ各地のハクチョウの状況を発表した。

だが質疑の中で１羽あたりのえさの量や群れの解釈などについても見解が分かれ、ハクチョウの研究がまだ初期の段階にあることが明らかになった。

もっとも関心を呼んだのは、「ハクチョウに対する人の態度の考察」と題した鳥取大講師で生物学者の岩田正俊さんの問題提起だった。岩田さんは一般に保護と呼ばれている態度の中身にも、「保護」「愛護」「過保護」などさまざまの姿勢があり、えさのやり方も「えづけ」と「給餌（じ）」「飼養」などそれぞれ異なるとし、そのうちいずれを選ぶべきかを問いかけた。

この背景には、最近、各地で行われているハクチョウの「えづけ」に対し、野鳥研究家などの一部から「野性を失わせ、自然への適応力を弱めてハクチョウたちを自滅に導く行為だ」との批判が出てきているという事実がある。

これに対し、会員たちの間からは、「確かにけじめがあいまい」という反省の声もあった。だが、「えづけ」については「自然の採餌場である沼や湖が干拓や河川改修などの開発により次々に姿を消している。また水の汚濁などにより、えさが取れなくなっているケースも多い。そんな中で鳥たちを放置することは、死に追いやるに等しい」との意見が大半を占めた。

さらにえづけを始めてから落鳥が減っている事実、えづけをしても暖かくなれば必ず北へ帰って行く事実などが反証としてあげられ、「ハクチョウの実態を知らずに批判するような評論家的学者も多い。その人たちはいったい自然のえさ場を守るために、どれほど努力をしているか」という厳しい議論も出た。

最後に、国が参加を検討しているラムサール条約（国際湿原保護条約）の早期実現を全員が強く要望、現在、保護指定候補地にあげられている北海道の釧路湿原、風蓮潟などに加え、県内の福島潟や佐潟なども検討対象に入れるよう、働きかけていくことを申し合わせた。